

# 宋教仁暗殺事件の意味するもの

——民初政争の一断面——

渡 辺 龍 策

## は じ め に

辛亥革命（1911年）の嵐は、1カ月の間に、華中、華南一帯に拡大したけれども、革命勢力の脆弱性は蔽うべくもなかった。巨大地主であり、かつ、買弁資本家である北洋軍閥の巨頭袁世凱が、反動勢力を率いて攻勢に転じたとき、革命派は袁の武力と謀略には歯がたたなかった。しかも、たんに清朝の後退をもって、革命が一応成功したものとの安易な考えにふけて、袁の偽装的民主主義に妥協して、新しい民国の支配権をあっさりと袁に譲り渡してしまったのである。中国市場の安定勢力を希求する列強が、革命派にはみきりをつけて、袁世凱支援に傾いたのは当然であり、それが革命の本質的失敗を決定的なものにしたといえる。

革命派はまさに決定的な段階においても、大衆を動員する代わりに、全勢力を議会における議席争得闘争に集中した。彼らは、臨時約法のもとに、民主主義的な合法的手段を用いて、議会万能主義の威力によって、袁の反動化を十分に防ぎ得ると信じていた。すなわち、南方派（革命派）は、唐紹儀内閣に4名の閣僚<sup>1)</sup>を送ったことにより、また、北京参議院においてその過半数を占めていることにより、袁世凱一派の専横を防止できるものと考えていたのであった。

一方袁世凱は、たとい、彼の背後に清朝以来の軍閥官僚の大勢力を有し、唐内閣にも5名の閣僚<sup>2)</sup>を出しているにしても、自からの名をもって公布した臨時約法を尊重するかぎりにおいては、参議院の存在を無視するわけ

にはいかなかった。したがって袁にとっては、彼が中国における真の実権者として、その独裁的手腕を駆使しようとするならば、まず、参議院をその思うがままに操縦し得るような手段を講ずることが必要であった。そこで、参議院における南方派に手をさしのべ、その懐柔に着手した。<sup>2)</sup> 懐柔はやがて威嚇となり弾圧となる。

正式国会の選挙は1913年2月に行なわれ、国民党系議員は袁の与党とみられる共和・統一・民主の3党の総議席数をはるかに凌駕した。このことは、国民党内閣の出現を忌避する袁世凱にとっては、大きな傷手であった。かくて、袁は実力に訴えて、国民党の切崩しに乗り出さざるを得なくなった。その魔手に倒れたのが、国民党の領袖宋教仁であった。

国民党は、選挙の大勝に乘じ、宋教仁を総理に推し、国民党内閣をつくらうと勇躍した。全国遊説中の宋教仁は、上海から北京に向うために滬寧線停車場まできたとき、突然刺客に襲われ、32才をもって黄泉の客となった（1913年3月20日）。袁世凱は、宋が北上すれば、国民党の声势が一致と加わるのを恐れ、時の國務総理趙秉鈞に宋の暗殺を命じ、趙は、國務院秘書洪述祖をしてそのことにあたらせ、洪は応慶馨・吳福銘（武士英と偽名）を使って宋を暗殺したことが、明らかとなったのである。

以下わたくしは、つとめてこの事件に焦点をしぼって、一応の説明を試みることによって、中国近代政治史において大きな地位を占める北洋軍閥の一面を啓示してみたい。

1) 教育総長蔡元培、司法総長王寵惠、農林総長宋教仁、工商総長陳其美。

2) 陸軍総長段祺瑞、海軍総長劉冠雄、内務総長趙秉鈞、財政総長熊希齡、外交総長陸徵祥。

3) 及川恒忠、中国政治史、昭和29年、P. 29.

## I 民初の政党事情

### 一 政党の林立

中国の政党は、清末における民主革命および君主立憲の両運動に源を発する。<sup>1)</sup> はじめて公開的政党組織を採用したのは、1911年、資政院<sup>2)</sup> 内に

における民権革命団体たる憲友会である。しかし、両派の非公開的の結社、すなわち、張有為らの領導する君主立憲主義の強国会、孫文を首領とする民主革命主義の興中会が組織されたのは、それより17年後、1894年のことである。

強国会は、1898年、保国会と改称し、更に戊戌政変（1898年）後には保皇会と改名したが、他面、張謇を指導者として、同系統の君主立憲主義者によって、予備立憲公会の組織をみた。公開的組織政党の嚆矢である憲友会はこの系統である。一方、興中会は憲友会より多少おくれて、中国同盟会となり（1912年）、後の国民党へと発展した。

かく、清朝倒壊に成功した辛亥革命（1911年）は、政權争奪の手段としての公開政党の生成を促がした。従来の秘密結社なども、公然政党組織を採用することになり、また新しく公開の結社を組織する者も多く、かくて、民国初年の政団林立期を出現したのである。その政党名を列挙すれば、次の通りである。<sup>3)</sup>

## 二 主なる政党の概観

(1) 中国同盟会 これは、辛亥革命に際し、主動的地位にたった秘密結社中国革命同盟の後身である。南北統一とともに、孫文・黄興・宋教仁・黎元洪・平剛・張繼・胡漢民・居正・汪兆銘・田桐などを領袖として政党組織を採用した。南方派革命的政客のほとんどがこれに属し、参議院に拠って、袁世凱に対抗する反袁政党であった。<sup>4)</sup>

(2) 統一党 これは、中国同盟会が成立した際、章炳麟一派の光総会<sup>5)</sup>が、その社会主義的政綱に反対して、革命党を離脱し、張謇の率いる予備立憲会と合同して組織したもので、江蘇・浙江両省の郷紳を地盤とした官僚的政党であった。非同盟会的感情を主とした政党であるから、同盟会の政敵たる袁世凱を謳歌することになり、袁の中核的与党をなすにいたった。

(3) 民社 これは、ルソーの民約論を根本主義とし、共和政治の健全な発達を目的とした。湖北派の孫武や藍天蔚らが同盟会を離脱し、黎元洪を首領に推薦して組織した保守的政党であった。幹部には、この2人の

ほか、張振武・張伯烈・劉成禺・寧調元・饒漢祥らの名がみえる。後に統一党その他と合同して共和党となったものである。

(4) 共和建設討論会・共和統一党　ともに、憲友会の系統をひいた政団で、前者は湯化竜・林長民を代表的人物とし、後者は孫洪伊が北方における同志をまとめてつくったものである。両政団とも漸進主義を主張し、梁啓超が帰国するや、彼を首領として、民主党をつくったものである。

(5) 統一共和党　谷鍾秀・彭允彝・吳景濂・殷汝驤・趙世鈺・歐陽振声の首唱してできたものである。その政綱をみると、同盟会とよく似ている。<sup>6)</sup>

(6) 国民共進会　会長は伍廷芳、副会長は王寵惠、会員には陳錦濤・徐謙・許世英・林志鈞・牟琳・陳鐸・江辛らを有し、健全な共和政体の完成を目的とした。

(7) 国民公党　上海に起こった政党で、岑春煊・伍廷芳が名誉総理、王人文・溫宗堯らが幹部であった。健全な政党を組織し、民国の基礎を鞏固にし、国利民福を増進することを目的とした。

(8) 共和突進会　上海において結成され、董之雲らを領袖としたもので国民党である。

(9) 自由党・社会党　ともに中国同盟会の別働隊である。前者は、上海天鐸報社長李懷霜や民権報主筆周浩・同記者戴天仇らを中心としていた。後者は、正式の名称を中国社会民主党と称し、浙江人江亢虎の首唱するところで、張繼がフランスから帰国するや、その首班に推された。このほか、江亢虎・李懷霜・殷仁・陳翼竜・沙淦・葉夏声らが首領格として関係していた。もちろん、孫文も党外からの顧問的領袖であった。

(10) 国民協進会　范源濂・蹇念益・籍忠寅・黃群・陳懋鼎・黃為基・周大烈が領袖として顔をつらねている。

(11) 民国公会　張國維が領袖である。民国協進会とともに、共和党の組成分子である。

(12) 国民党　政綱とするところは、「全国統一政治のもとに人民をもって、国家主体となし、その固有の権利を完全に保護し、共和の精神を發

揚する」というのであったが、実は、親米派の団結したもので、伍廷芳を領袖として、潘鴻鼎・溫宗堯が実権を握っていた。後の同盟会系の大団結の結果生れた国民党とは全く異なるものである。

(13) 共和俱進会・共和促進会・国民新政社 いずれにしても共和成立とともに、北京に起こった政党で、後に共和統一党の孫洪伊の尽力で、共和建設討論会と合併した。

### 三分離と併合

以上のうちで、中国同盟会・統一党・民社が最有力であった。多少前述と重複する点があるが、その離合の経緯をいさ少しく詳述しておく必要がある。

そもそも、同盟会が標榜した民族・民権・民生の三大綱中、臨時政府を組織した時期には、多数の黨員は、民族主義のみを認めた。すなわち、満洲族からの漢民族の解放であった。したがって、清朝が崩壊すると、多数黨員の結合のカナメは消滅したことになる。ここにおいて、分裂は必然的となった。

同盟会の主要人物たる章炳麟は、辛亥革命以前から、党の中でも孫文と対立的存在であった。辛亥革命が成立するや、同盟会から離脱し、中華民国連合会を組織した。湖北の孫武・藍天蔚・劉成禺らも、この時期において、張伯烈・饒漢卿らとともに、黎元培を首領として、湖北人を中心に民社を組織した。湯化竜・林長民らは、その一派を率いて分裂し、共和建設討論会を組織した。孫洪伊も共和統一党を組織し、籍忠寅・周大烈らは国民協進会を組織したことは前にも触れた通りである。

かくの如き分裂は、やがて併合作用を起こした。こうなると、南京臨時政府当時、イニシャチーブを握っていた同盟会幹部は、壯年黨員を制禦し得なくなった。この氣運に乗じて、同盟会外の団体は、結合の傾向を辿った。章炳麟の中華民国連合会と、かつて予備立憲公会の領袖であった張謇らは、浙江人を中心にして、連合して統一党を組織した。後にいたって、統一党は、籍忠寅らの国民協進会および湖北団体の民社と連合して共和党

かくて民国元年8月、同盟会は統一共和党・国民共進会・共和実進会・国民公党と合して、国民党の出現となった。このようにして、北京参議院開会後においては、国民党・共和党・統一党・民主党の4党をみるにいたった。これ中合同時代である。

			統一共和黨	
同 盟 會	— 同 盟 會 —	— 同 盟 會 —	— 國 民 黨 —	
	— 民 社 —	— 國 民 共 進 會 —		
	— 中 華 民 國 連 合 會 —	— 國 民 公 黨 —		
		— 共 和 突 進 會 —		
予 備 立 憲 公 會		— 統 一 黨 —	— 共 和 黨 —	— 統 一 黨 —
			— 民 國 公 會 —	— 共 和 黨 —
			— (前) 國 民 黨 —	
	— 國 民 協 進 會 —			
	— 憲 友 會 —	— 共 和 建 設 討 論 會 —		
	— 共 和 統 一 黨 —		— 民 主 黨 —	— 進 步 黨 —
	— 共 和 俱 進 會 —			
	— 共 和 促 進 會 —			
	— 國 民 新 政 社 —			

- 1) Chi-Hung Lynn, Political Parties in China, 1930, pp. 20—21.
- 2) 宣統元年(1909年)7月8日、資成院開設に関する全章程(10章65条付録2条)が発表され、1910年10月3日、第1期の開院式が挙行された。資成院は、その設立の上諭にもある通り、国会の開会にいたるまで、これに代わるべきものであった。
- 3) 紙数の関係上、各党を詳しく説明することは省略した。
- 4) 黎元洪は、ただ名をつらねただけで、この会との関係はほとんどないといつてよく、むしろ、民社の方に尽力していた。平剛は、後に参議院秘書長になつた。

た人物である。實際上、党勢を推進したのは宋教仁であった。張繼は、同時に社会党の領袖であったが、後年は思想上の変化をきたし、参議院議長となった。幹部として名を出していないが、唐紹儀は、当時すでにこの会と関係を有していたことは注目すべき事実である。（波多野幹一・松本鉛吉、支那の政党、大正8年、p. 123.）

- 5) 興中会を広東派とすれば、華興会は湖南派であり、光復会は浙江派である。（及川恒忠、支那政治組織の研究、昭和8年、p. 297.）
- 6) 統一共和党政綱——(1)行政区域を劃定し、中央統一を期す。(2)税制規格を定め、負担の公平を期す。(3)民生を重んじ、社会政策を採用す。(4)国民の商工業の発達を謀り、保護貿易政策を採用す。(5)幣制の統一と金本位制を採用す。(6)金融機関を整頓し、国家銀行制度を採用す。(7)鉄道幹線およびその他交通機関を建設す。(8)軍、国民教育の実施と専門學術の促進を期す。(9)陸海軍軍備の刷新と徴兵制度の採用を期す。(10)海外移民を保護し、辺地開墾を励行す。(11)文化の普及、国内民族の融和を計る。(12)国交を重んじ、國際權利の平等を保持す。
- 7) 李創農、中興百年政治史、民国46年、p. 364.
- 8) 李創農、前掲書、p. 367.

## Ⅱ 事件の政治的背景

### 一 袁世凱の国会対策

参議院は南京から北遷して、民国元年4月29日、北京臨時参議院が開かれた。当時は、同盟会の全盛時代であったので、袁世凱は、これに対抗するために、まず、反同盟会系の統一党を与党化し、ついで民社、国民党、国民協進会、民権公会を合同して共和党を組織し、同盟会に対抗した。1912年（民国元年）5月のことであった。

袁政府の御用党的色彩は、同党の党議(1)全国の統一を保持し国家主義をとる。(2)国家權力をもって国民の進歩を扶持す。(3)世界の大勢に応じ平和実利をもって國を立つ、の項目にも明らかに看取されるところである。

5月5日の発会式は、黎元洪を理事長に、張謇・那彦圖・章炳麟・程德全・伍廷芳を理事に推し、幹事に、林長民・王印川・湯化竜・范源廉・王家襄・張伯烈・王揖唐・潘鴻鼎・劉成禹・龔煥辰・唐文治・楊成棟・孟森・劉瑩沢・黃雲鵬・吳景濂・鵬念益・黃群・陳懋鼎・蔣忠寅・孫堯緒・林志鈞等々54人をあげた。

しかし、章炳麟は統一党にとどまることを宣言し、王揖唐・王印川らもこれと行動をとともにした。また、湯化竜・林長民ら共和建設討論会系は、梁啓超の帰国をまって、民主党の結成へと走った。がともあれ、袁世凱としては、まず、初期の陣容を整えたわけである。

そこで袁は、いよいよ南方派の弾圧をはじめた。まず、同盟会に同情をもつ國務總理唐紹儀に圧迫を加え、6月15日、内閣の総辞職を行なわせた。

そもそも唐紹儀内閣は、臨時約法に基づいて組織された責任内閣である。したがって、大總統が政務を執行する場合には、必ず國務會議に大總統を加えて、その議決を経た上でなければ政務を執行することができない。このことは、独裁をめざす袁世凱にとっては、まことに不自由なことであった。かつ、袁世凱と唐紹儀との関係はもともと深いものであったけれども、<sup>2)</sup> 南北和議を境として、たがいに快からぬ仲となった。袁は唐を退陣させて、いわゆる、御用内閣をつくろうと考えて、自派の閣僚を使喚して画策していた。

ところが、折しも、唐は國務會議の決議を経て、同派の王芝祥を直隸都督に任命したが、これは袁大總統に拒否された。このことは、唐紹儀の憤慨をかったが、たまたま、ベルギー借款事件が起こった。これは、かいつまんでいうならば、唐が北京政府の財政建直しのため、袁と関係の深い英・米・仏・露・日の6国借款を無視して、ベルギー借款団と直接交渉を行なったため、6国借款の抗議にあい、計画を破棄せざるを得なくなったという事件である。このことは、外国の援助に汲々たる袁に対して、唐總理の辞職を強要せしめる原因となり、ついに、唐は内閣を投げ出して、天津にのがれた。

袁世凱はその後任として、6月29日、陸徵祥を任命した。同盟会は、陸の任命に対しては同意を与えはしたが、唐内閣退陣に対する報復手段として、陸内閣の新國務員任命の同意案を否決して、組閣の流産を策した。しかしながら、このことは、かえって、政略をこととするという印象を国民に与えたので、袁はこれを逆用して、參議院の切崩しに成功し、<sup>3)</sup> 陸内閣は8月2日、ようやくにして成立をみた。



## 二 国民党の結成と大勝

かくて、同盟会の領袖宋教仁は、党勢を挽回するために、従来の急進主義を修正し、<sup>8)</sup> 同盟会、統一共和党、国民共進会、共和実進会、国民公党の5政党が合同することになり、8月25日、北京において国民党の誕生をみた。この新党の国民党は、参議院における議席の3分の2を占めることになった。

政綱として掲げた主なるものは、(1)政治の統一 (2)地方自治の発展 (3)種族同化 (4)国家社会主義採用 (5)国際平和の維持の5項目で、中国同盟会時代の「男女平権」のような主張はみあたらない。

ちなみに、新幹部名を拾ってみよう。

理事 孫文・黄興・王人文・王芝祥・宋教仁・張鳳翽・吳景濂・王寵惠・  
賈桑諸爾布

参事 閻錫山・張繼・李烈鈞・胡瑛・沈秉堃・温宗堯・陳錦濤・陳道一・  
莫永貞・褚輔成・松毓・楊增新・干右任・馬君武・田桐・譚延闓・  
張培爵・徐謙・王喜荃・姚錫光・趙炳麟・柏文蔚・孫毓筠・景耀  
月・虞汝鈞・張琴・王伝炯・曾昭文・蔣翊武・陳明遠

備補参議 尹昌衡・袁家晋・唐紹儀・唐文治・胡漢民・王紹祖・高金釧・許  
廉・夏仁樹・賀国昌

陸徵祥は9月22日、辞職して趙秉鈞が後継内閣の首班に任命された。<sup>4)</sup>  
翌1913年（民国2年）2月、前年の8月の臨時参議院制定の国会組織法<sup>5)</sup>  
および参衆両院選挙法<sup>6)</sup>に基づく最初の総選挙が行なわれた。臨時約法第  
53条の規定によれば、「本約法施行後10カ月以内にかぎり、臨時大總統は  
国会を召集する。国会の組織および選挙法は参議院がこれを議定する」と  
あり、臨時約法は民国元年3月11日の公布であるから、国会は、本来なら  
ば、民国2年1月11日以前に召集さるべきものであった。しかし、国会組  
織法、選挙法の制定が遅引し、民国元年8月9日にいたって、ようやく、  
国会組織法が公布され、同月10日に両院議員選挙法が、9月20日に衆議院

議員選挙法施行細則が、12月8日に参議院議員選挙法施行細則が、それぞれ公布されたので、このため総選挙は遅延したのであった。この選挙は、民国元年12月中旬初選挙を終わり、2年2月をもって復選挙を終えたが、その結果は、左の如く宋教仁のリードする国民党の大勝に帰した。<sup>7)</sup>

政 党	衆議院	参議院	合 計
国 民 党	269	123	392
共 和 党	120	55	175
統 一 党	18	6	24
民 主 党	16	8	24
跨 党 者	147	38	185
不 明	26	44	70
総 計	596	274	870

国民党は両院を合して、392 の議席を獲得し、袁世凱の与党とみられる共和・統一・民主の3党の連合勢力をもってしても、とうてい及ばないという結果を招いた。

- 1) 袁・唐の関係は朝鮮にはじまる。袁が朝鮮総領事官の任にあったとき、維新党員の朴泳考が郵政局に宴を設けて、閔泳翊を暗殺した。袁は、鎮圧のため部隊を率いて郵政局に赴いたが、そのとき衛兵としての局員唐紹儀の態度が袁の心を惹いた。これが兩人の相知る最初であったといわれる。(李鼎農, 前掲書, p. 373.)。袁の小站における時代、徐世昌が管務処の総理となり、唐はその副総理に任ぜられた。袁が山東巡撫になったとき(1899年)には、唐も随員として山東に赴き、外交事務を担当し、また、商務局の総司に任ぜられた。袁が直隸都督に就任するや(1901年)、津海道尹に推薦された。袁が外務部尚書兼軍機大臣に任ぜられたとき(1907年)、2人の関係はとくに親密であった。以上の如き事情から、袁としては唐を自己が養成した人材で、その思うままになると考えていたのであった。
- 2) 袁世凱は、軍人を使喚して参議院解散を高唱せしめた。北京の軍警兩界、南方の新聞社、章炳麟・王揖唐ら統一党一派、湖北第四師團長鄧玉麟らの激烈な反対は、毎日、新聞紙上に発表され、同盟会および共和党の間にあって、キャスティング・ヴォートを握っていた共和建設討論会および統一共和党の態度変更によって同月29日、第2次國務員は参議院を通過したのであった。教育范源廉、司法許世英、農林陳振先、財政周學熙、交通朱啓鈴、工商劉揆一である。(波多

野乾一・松本鈴吉，前掲書，pp. 136—137)

- 3) 甘万光は、「党史」において、この点に言及し、「宋教仁輩は、革命党を改良派にしてしまった。われわれは、このとき、主義上の亡党に会していたのだ。總理孫文は、宋教仁主動の国民党にはきわめて冷淡だった。汪兆銘・胡漢民・朱執信・廖仲愷同志もそうだった」と迷っている。（及川恒忠・前掲書——支那政治組織の研究——，p. 303. にみゆ）。孫文は辛亥革命から討袁革命にかけて、ほとんど沈黙を守っていた。
- 4) 南方派の軍人，張振武・方維の銃殺事件に端を發して，国民党は陸内閣をはげしく攻撃したために，辭職をみたのである。当時，袁世凱の南方派に対する態度は一時的に，いちじるしく緩和されていたので，国民党も後継首班の趙秉鈞が袁系であるにもかかわらず，閣員の形式的な国民党入党を条件として，これを呑んだのである。
- 5) 6) 顧敦録，中国議會史，民国20年，pp 427—431, 443—448, 448—471.
- 7) 波多野乾一・松本鈴吉，前掲書，p. 190; 及川恒忠，前掲書（支那政治組織の研究），p. 304.

### Ⅲ 事件の真相

#### 一 宋教仁の暗殺

前表にみる如く，国民党の議席の多数は，二重登録者を除いても，他党を圧倒し得るものである。かぐて，国民党は，選挙に大勝を博してからは，政党内閣の組織勢力をもって自任するにいたり，宋教仁を總理に推したてて，一挙に国民党内閣を組織しようとした。<sup>1)</sup>

宋教仁の意圖するところは，總統としては袁世凱を適任者と認めたが，しかし，内閣は，国会における多数党が組織すべきであるとした。しかしながら，軍閥・官僚は，憲政路線にそう行動を喜ばなかった。かくて，期待を裏切られた袁世凱は，武断統一政策に乗り出した。

袁世凱が，宋教仁を死地に追い込まざるを得なかったのは，いうまでもなく，国民党が選挙に大勝を博し，国会の勢力をかりて，組閣を迫るのをおそれたがためであった。袁は，かつて宋の買収を試みたこともあったが，<sup>2)</sup> 宋はその手に乗らなかった。国民党の実力者としての宋は，袁の野望のもとでは，最大の痛であったに違いない。

宋は、湖南に母の病を見舞い、湖南から漢口、南京を経て一路政党内閣論を高唱して民衆の喝采を博した。3月20日、上海から北京に向うために滬甯線停車場にきたとき、刺客に襲われ、22日、壮齡32才をもって絶命した。袁總統は、宋教仁が北上すれば、国民党の聲望が一段と加わるのをおそれ、總理趙秉鈞に宋暗殺を命じ、趙は、國務院秘書洪述祖をして、その事にあたらしめたことは、後の数々の証拠がこれを明らかにしている。<sup>7)</sup>

## 二 証 拠 の 文 書

宋教仁暗殺後、直ちに3月23、24の両日にわたり、犯人武士英（本名吳銘福）および応斐丞（応桂馨）が逮捕され、家宅搜索の結果、応の住宅から多数の証拠物件が押収された。それによって、共犯として國務院秘書洪述祖が含まれ、國務總理趙秉鈞および袁世凱がその主動力となっていたことが、明らかにされた。

この事件の調査にあたったのは、江蘇省都督程德全と民政長應德閔であった。その調査報告書の中に、犯人応桂馨と趙總理の間に往復された文書が証拠としてあがっている。<sup>8)</sup>

電報は主として暗号を用いたことは、1月14日付、趙總理から応桂馨に「暗号簿を送る。査収されたし。以後直接國務院に電せよ」との書頭を与えておくことでも明らかである。しかも、押収物の中にはその暗号簿3冊があり、そのうちの1冊には表紙に、「國務院（応暗号）民国2年1月14日」の字句が記されていた。<sup>9)</sup>

応から直接趙宛の文書のうち、2、3をあげてみれば、1月26日付「国会いたずらに争い、すでに目的を収めたるに近し。洪参上して面談す。」2月1日付「憲法起草の件、書翰と金銭とにて買収し、次の2項を主張す。すなわち、總理のほかは投票しないこと、国会を解散すること。このほか、何海鳴・戴天仇は別に対策を講ず。」2月2日付「孫・黃・黎・宋たちの活動目ざましく、国民党は總理に推すことを内定せり。すでに孫・黃・宋の日本における過去の醜聞を手に入れたので、警視庁にて複写をとり、10万冊を横浜より出版の予定。」<sup>10)</sup>

また、応と國務院文書洪述祖との往復文書中、2月1日付洪から応へ与えたものの中に、「大問題は激烈な文書にする必要あり」とあり、2月2日付では「重要文書一部謄見の模様につき、激烈な行動によること必要なりという。事件前、趙總理に向って、暗号電報にて運動費を請求せらるべし」とある。これらとともに、宋暗殺の発端を暗示している。「緊急文書」「過激な行動」とは諷刺をさす。「必要なりという」の「いう」とは、おそらく、趙總理もしくは袁總統がいったものと解されよう。

袁・趙側としては、応に先に金を与えることによって、応が消極的になることを警戒した向きがうかがわれる。金や地位をおとりとして、応の気持ちをおのびきならぬところまで、追い込んだものと想像される。この推定資料としては、2月4日付、洪から応に与えた文書に現われている。「……趙が受領後小生に渡さる。總統の一覽に供したところ、喜色満面、君の手腕あることをほめ、端緒をつかめば、進行を望むとのこと。金のことをほのめかしたところ、宋の詐偽事件および召喚状写しを送付して証拠となすという。以後暗号〔川〕にて通信せよ」<sup>9)</sup>

また、2月22日付では「貴翰すでに總統に手交せり。以後國務院に電報は無用。趙は暗号簿〔応〕を持参。程より機密がもれるのをおそれ、小生一本に処理することを求め来れるものなり。金銭は証拠物件<sup>10)</sup>到着後とする。その額は30万元を越えざること」と述べている。

応の金銭の要求が夢物語であったことは、3月13日、洪に与えた電文によく現われている。「宋の南京における演説は、南方人士に至大の感動を与え、近來彼の勢力ははかるべからず。事は重大なり。根本的な対策を講ずるため、宋を除かざれば、將來最悪の事態を招来し、大局は必ず騒乱にいたらん。20万元を送付せよ。生命を賭して着々進行せん」と。

これに対して、洪はこうした件に対して「すでに財務總長の許可を得た。公債は6厘どまり、割引が過大なれば、宋暗殺による報酬としての勲位を得るに妨げとなる。熟考の上適宜処理せよ」という意味の返事している。

袁・趙側を弁護する人士は、この事件は、洪・応両名が金銭と地位を得ようとする策謀で、あくまで両名間の勝手な挙動で、袁・趙の関知しない

ことであると極論している。<sup>8)</sup> もちろん、応たちの意図は、金銭・地位にあったかもしれないが、これを袁・趙が巧みに利用したことは明白である。とくに、次項の往復文書は、いかに曲解しても、袁・趙の責任を免れる余地はなかろう。

### 三 暗殺前後の往復文書

3月14日、応は洪に対して「梁山の匪魁、各地において騒乱しつつあり、甚だしく危険なり。特別緊急命令するよう伝達乞う。指示待つ」と打電した。「梁山の匪魁」とは、もちろん宋教仁をさす。この電文は、緊急命令、すなわち宋暗殺命令をくだすよう袁・趙へ上申されたいとの意味である。

かくて、急速に進転をみた。これを両者の往復文書<sup>9)</sup>にみよう。

3月19日、洪より応へ——「すみやかに実行せよ」

3月20日、応より洪へ——「午前零時40分、緊急命令に到達せり」

3月21日、応より洪へ——「匪魁すでに滅せり。わが軍1人の死傷なし。安心乞う」

3月23日、洪より応へ——「前電すべて落手す。以後返電無用。4月17日上海に出張す」

以上の如くであるが、上述の3月23日付の電文は、応の逮捕後郵便局から配達されたものである。天津局から上海局に、返送するよう連絡したが、そのときはすでにおそく、交渉員署を通じ、程徳全の手もとに渡っていた。

また、応の家宅捜査の際、趙総理から洪への書函数通が発見された。その数通は洪から応に宛てたものであるが、その中に「応君は手紙を受取ってから、あまり顔を見せない。やはり一手で処理するよう、総統と談合されたし云々」の意味のものがあつた。これは、洪を袁と応の仲介役にして、趙を経由しない計画を物語っている。

同時に、次の文書が押収された。——議院・政府を監督する裁判機關の宣言文の写しを、各地の新聞社に発送するように、切手を貼って未投函のもの42通である。これは、宋暗殺後3月26日、國務院が各省に打電した文書に基づくものである。すなわち、「応慶丞の23日付書函によれば、上海に

政府・政党を監督する一種の裁判機関が出現し、添付した宣言文には、宋教仁・梁啓超・袁世凱・趙秉鈞・汪榮宝らの罪状を列記して、彼らを懲罰に処し、とくに、宋教仁は死刑に処し、即時執行すべきである」と主張するというのである。これは、趙・応・洪らが、これによって社会の耳目を惹くそうとする手段にすぎない。<sup>10)</sup>

#### 四 袁世凱のもみけし工作

上述の証拠から、趙秉鈞が嫌疑者と判断されただけでなく、袁世凱すら嫌疑を免れなかった。その後における応桂馨および趙秉鈞の急死により、袁の嫌疑はますます濃厚となった。3月22日、袁は通電して、そろそろい痛惜の意を表している。<sup>11)</sup>

宋暗殺事件について、袁は最初は、特別裁判を開く計画であったが、司法総長の許世英が極力反対したため、上海の法院（公共租界会審公堂）で審議されることになった。弁護人金泯瀾の要求により、洪祖述および趙秉鈞の出頭令状が発せられた。

事件後、洪祖述は北京を潜逃して青島に遁入していた。<sup>12)</sup> 趙秉鈞は辞職を請願したが、袁總統は、かえって疑惑をますますおそれてこれを許さず、北京にて休暇をとることを許可したにすぎない。そして袁は、趙の出頭令状に対して牽制策を行なった。すなわち、北京において、袁・趙暗殺計画のデマを流し、この嫌疑者として北京陸軍執法処をして多数の者を逮捕せしめた。血光團と称する政府要人の暗殺団の名簿を入手したと称し、国民党参議員謝持をも逮捕し、血光團員であると偽称せしめ、なお、周予（女子暗殺団長）を買収して、黄興の責任の如く虚偽の自供をなさしめた。かくて、上海法院の趙秉鈞出頭令状に対抗して、北京では、黄興の出頭令状を出した。このようにして、司法上の刑事問題を政治権力下に操縦し、上海における宋暗殺事件の審理を妨害したのである。かかる状態であったので裁判は進展をみなかった。

犯人武士英は、その年4月24日、獄裡に毒死し<sup>13)</sup>、応桂馨は、5月28日、上海製造局の火災<sup>14)</sup>にまぎれ逃走し、11月、青島から政府に打電して無罪

の立証を要求している。翌年1月、北京に潜入し、19日、天津に赴く車中で、王滋福の手によって暗殺された。<sup>15)</sup> 当時、直隸都督であった趙秉鈞は、暗殺された応なるものが、宋教仁暗殺の犯人たることに気づかず、応を暗殺した王滋福を逮捕した後にはたて、殺された応が応桂馨その者であったことを知り、袁世凱を責めた。袁としては、趙が秘密を暴露することをおそれたためであろう。

- 1) 波多野乾一・松本鎭吉，前掲書，p. 151.
- 2) 同上書，p. 151；波多野乾一，中国国民党通史，昭和18年，p. 171.
- 3) そのうちの電報は、上海電報局で、犯人応が往復した電報控を、程德全と応德全が調査の上、これを翻訳したものである。
- 4) 李劍農，前掲書，p. 335.
- 5) これは、応より程経世氣付趙總理に宛てたものである。
- 6) 実際には、いわゆる宋詐偽事件も召喚状も、ともに架空のことで、犯人応は、これによって袁世凱から金を騙取しようとしたのである。（李劍農，前掲書，p. 336.）
- 7) 宋の詐欺事件をさすか（李劍農，前掲書，p. 336.），殺害の報告電報をさすか（波多野乾一・松本鎭吉，前掲書，p. 152.）は不明である。
- 8) 例えば，奈良一雄，大事件と袁世凱，大正4年，pp. 156—176.
- 9) 李劍農，前掲書，p. 337. 波多野乾一・松本鎭吉，前掲書，p. 153.
- 10) 李劍農，前掲書，pp. 337—338.
- 11) 「……宋君純邪傷を受け昨已に電筋して直ちに重賞を懸け，期を限りて緝獲せしむ。此案破らざれば民国人民自ら危ぶみ，弓影杯蛇相尋ねて已まず。その前途に影響する誠に細故にあらず。宋君才識超邁，忽ち意外に遇う。誠に痛心す可し。諸を西医に訪う。苟も血管裂れざれば槍子を取り出すも尚ほ貴れなしと。前年劉龍訓決に在り槍を以て自ら撃ち，亦小腹を洞く。医治取出し今に至る生全し但望む宋君危を転じて安と為さは万幸と為す。目前總へて購線を以て凶を緝へ，期を限りて案を破るを以て第一要義と為す。克強（黃興）同行して驚を受く。嗣後の出入応さに執事より多数の憲兵を派し，妥かに保護を為し，以て慎重を期かにすべし。上年孫貴來京の際，軍警に筋して盛に防衛を説く，誠に已むを得ざるのみ。滬上の人類齊しからず。但車站の電灯林列。凶手の状態必ず能く之を知る者あらん。重賞懸置せは当さに水落ち石出づるに難からざるべし。（奈良一雄，前掲書，pp. 163—164.）
- 12) 彼は青島より政府に電訴して，その冤罪を述べている。——「述祖の宗旨は暴宋の劣迹を挙げ，宋の名誉を毀り以てその党派専制の鬼蜮を破らんとしたる



に過ぎず。その往来したる電函を以て謀殺の証拠と為すに足らず云々」（奈良一雄、前掲書、p. 174.）彼は、後にいたり、宋教仁の遺子によって控訴され死刑を宣告された。

- 13) 吉林師範大学中国近代史教研究編、中国近代史事記、1959年、p. 376.
- 14) いわゆる銃撃の乱。
- 15) 袁の密令によるとする説が強い。

#### Ⅳ 事件の政治的波紋

##### 一 袁世凱の借款政策

陰謀による宋教仁暗殺の結果は、いよいよ南北の暗闘を烈しくした。袁世凱は、南方との紛争の不可避をかねてより察知していたので、暗々裡に外国よりの借款の促進を計画していた。宋暗殺の真相の正式発表の日、4月26日、2千5百万ポンドの借款契約を、5国借款団との間に締結した。この借款団は、辛亥革命後、日本・ロシアの加入により6国借款団となり、ついで、日本・ロシアの加入によって満洲進出を阻止されたアメリカが、列強の財政監督権の要求を苛酷なものとして退出し、5国借款団となるなど国際的にももめぬいてきたものである。<sup>1)</sup> この点について、次に一応の経緯を略述してあこう。

1912年2月15日、革命軍との和議条件に従い、孫文のあとを襲って、臨時大總統に就任した袁世凱は、巨額の軍費・政費の調達のために、これを外国借款に求めた。まず4国借款団<sup>2)</sup>に借款を申し込んだのが手はじめである。4国借款団は、爾後の借款引受けの優先権を条件として、これに応じた。そして、塩税を担保として、1912年3月—8月の政費の立替を約し、310万両を前渡した。ところが、袁は同年3月14日、4国借款団との約に背き、ベルギー財団代表華比銀行 (Banque Belge pour l'Etranger) との間に1千万ポンドの借款契約を結び、前渡金100万ポンドを受けた。この故に、4国借款団との契約は破棄された。

袁世凱のかかる背約行為は、4国借款団の強化を促した。4国借款団は日・露両国に対し加入を懇請し、同年6月、6国借款団の成立をみた。し

かし、財政急迫に悩む袁は、この6国借款団に対しても、2団にわたって違約行為をしている。すなわち、この6国借款団に6億兩の借款を交渉中、7月12日、借款団と無関係のイギリスのジャクソン・シンジケート(Jacson International Syndicate)の代表であるクリスプ商会(G. Birch Crisp & Co.)との間に1千万ポンドの借款の契約を結んだ。当然これは6国借款団の抗議にあい、12月23日、中華民國政府が賠償金を支払って取消した。<sup>3)</sup> ついで翌1913年4月10日、これまた借款団と無関係の独商瑞記洋行(Arnhold Karberg & Co.)と320万ポンドの借款契約を結んだのである。

ところが、米大統領に当選したウイルソン(Woodrow Wilson)は、1913年3月18日の教書において、6国借款団が中華民國政府に要求している条件は、中国の独立を犯すおそれがあるから、アメリカ政府は、この問題に関し、自国銀行団を支持しないということを明言した。それ故に、アメリカ銀行団は借款団から脱退し<sup>4)</sup>、6国借款団は5国借款団となったのである。

袁世凱が、第1次国会開催中にもかかわらず、その承認を経ずして、2千5百万ポンドの借款を締結したのは、この5国借款団に対してであった。もちろん、国民党の反対意見をまつまでもなく、これは南方彈圧費であった。この借款は、4月26日「中華民國政府5分利付改革金貨借款」いわゆる「改革借款」として締結された。約款中、担保たる塩政収入を確實にするため、塩制改革を実行し、塩税徴収につき外国人の監督を認めたこと(第5条)および借款手取金の使途を明確にして、その支出に外国人の承認を必要としたこと(第14条第2項以下)などは、明らかに中国の財政に対する外国管理を認めたものであった。ここに、軍閥袁世凱の買弁的性格が現われている。

かかる5国借款団の対華投資独占に対しては、英・露・仏の非加盟銀行から反対論が起こり、また、中国国内では、この改革借款の締結は国会の承認を経ておらず、約法違反であるとの反対論も起こり、ついに第二革命へと進展した。

## 二 第 二 革 命

宋暗殺事件発生後、袁世凱は積極的に南方との抗争態勢を強化したが、一方、孫文は、当初より政權を袁に譲り、暫らくは袁と抗争をさける意図を有していた。しかるに、宋事件が発生するや、日本に滞在中の孫文は、上海に帰来し、新中国建設の重任は袁に任かすべきではなく、袁を打倒するには、法律や筆舌をもっては奏功は望み難い。直ちに討袁軍をおこすべきである、との主張に変わったのである。

そこで、5国借款団との2千5百万ポンドの前後借款に対して、それが袁世凱の武力および財力を充実して、南方派圧迫に利用されることをおそれ、国民党は反対の烽火をあげた。<sup>5)</sup> 都督の中でも、安徽の柏文蔚、江西の李烈鈞、広東の胡漢民、湖南の譚延闓らも、これに同調して強論を吐いた。しかし、列強の支援と強力な武力と豊富な軍資金に頼って、すでに武力闘争を決意していた袁にとっては、かかる反対は痛手ではなかった。

梁啓超および王揖唐は、袁の命を受けて、共和党・民主党・統一党を合同して、5月29日、与党たる進歩党を組織し、ついで6月に入ると、相友会（劉揆一）、政友会（景耀目）、癸丑同志会（陳家鼎）、集益社（朱兆華）、超然社（郭人漳）などの小政団を国民党から分離させた。袁は、これのみに満足せず、更に、国民党中、急進的な南方革命軍人を一掃する決意を固めて、6月9日、江西都督李烈鈞を罷免したのをはじめとして、ついで10月4日には、広東都督胡漢民を西藏宣撫使に、安徽都督柏文蔚を川漢籌邊使に左遷した。罷免された李烈鈞は7月7日、江西省湖口に潜行して旧部下を集め、独立を宣言し、14日に討袁軍宣言を發表した。これ第二革命の発端として知られているところである。

上海にあった黃興はこれに呼応して、直ちに南京に赴き、張繼・蔡元培・汪兆銘などの協力を得て、革命軍を組織し、岑春煊を討袁軍大元帥とし、南京独立の挙兵を決行した。袁世凱は馮国璋・段祺瑞と相謀り、段芝貴・張煦・闕嗣沖らをして討伐軍の指揮を命じた。北軍の実力は、とうてい南軍の敵するところではなく、大衆もまた国民党側に加担して武器をとらね

ばならぬほどの理由を見出し得なかった。陳其美の上海江南機器局占領計画も失敗し、7月25日、江西省湖口も占領され、李烈鈞は8月9日に逃亡し、岑春煊は早くも7月末に逃亡、黄興もすでに南京に脱出してしまった。

第二革命はかくて、僅か2カ月にして9月2日には、北軍の南京入城、国民党側軍隊は完全敗北をもって終了した。大借款によって充実した北軍の実力を背景とした袁世凱の武断的専制政治の基礎は、この第二革命によって完全に築かれたとみてよからう。

- 1) 野沢豊, 孫文, 昭和37年, p. 167.
- 2) 満洲における鉄道利権の獲得に失策を重ねていたアメリカは、中国本土に利権を渉猟し、英・独・仏3国の銀行団が引受けようとしていた湖広鉄道借款に割込んで、1910年5月13日、英・米・独・仏の4国銀行団共同で、この借款の仮契約に調印した。この4国銀行団は、更に、同年11月10日、対清鉄道投資に関する一般協定を結び、4国借款団の組織をみたのである。
- 3) 田村幸策, 最近支那外交史 上, 昭和13年, pp. 223—227.
- 4) Harley Notter, The Origins of the Foreign Policy of Woodrow Wilson, 1937, p. 234.
- 5) ここにいたるまでには、国民党の内部事情は、けっして簡単なものではなかった。この経過については、李劍農, 前掲書, pp. 393—396参照。

## む す び

要するに、宋教仁暗殺事件は、革命派の「平和革命方式」にピリオドをうち、武力抗争への道を開らいた。しかし、国民党の内情は複雑をきわめ、袁世凱側の積極的工作によって、国民党からの脱党者が続出する有様となった。

かかる際、袁にとって、その独裁的権力を自由に行使するための最も重大な問題は、憲法問題であった。すなわち、臨時約法における国会の同意権を削除すること、国会の解散権を大總統に付与することの二つを折込んだ正式憲法の制定であった。それにはまず、彼自身が正式大總統に就任することであった。彼の辣腕をみるに、この間、大總統選挙に関する部分のみを草案から切離して、議會を通過させようとし、輩下の各省都督を利用

して、威嚇電報を打電させ、大總統選挙法を先決せしめた。選挙会の当日（10月6日）、袁は公民団と称する数万の民衆を操つて、両院議員を国会内に籠詰めとし、強引に1日で投票を完了させ、黎元洪との決定投票に勝利を得て、袁は正式大總統に当選、黎が副總統に当選という結果になった。万事は袁独特の権謀術数によって運ばれたのである。

かくて正式大總統に就任した袁世凱は、いよいよ正式憲法の制定に乗り出した。しかし、憲法起草委員会の動向が袁に不利とみるや、彼は11月4日クーデターを断行し、国民党を解散して、その所属議員438名の資格を剝奪した。ついで、翌年1月10日、国会の残余議員をも解散してしまったのである。

かくて、袁世凱の独裁支配の野望は強化され、やがて帝政運動へと進まざるのである。

北洋軍閥巨頭の独裁野望の裏付けは何か。ラティモア(Owen Lattimore)は述べている。「中国のように組織が非常に弱く、外国勢力が強い国にあっては、帝国主義は、その要求を安心して托せる人物を見出そうとする。19世紀には李鴻章、20世紀初期には袁世凱であった。帝国主義国は借款、武器装備、軍隊訓練など各方面にわたって援助を与えて、その強化をはかる」<sup>1)</sup>そして、辛亥革命は帝国主義国をして、清朝の滅亡を承認せしめはしたが、しかし、帝国主義はかえって袁世凱を見出し、彼を援助する結果となったのである。<sup>2)</sup>

げに、中国近代史を貫ぬく軍閥独裁政治の悲劇は、ここにその端を発するといえよう。

1) Owen Lattimore, *Solution in Asia*, 1945, p. 80.

2) Hu Sheng, *Imperialism and Chinese Politics*, 1955, p. 193.